宗長駿河日記

和書門
類 二六〇二三 號
函 架
冊

内閣文庫
和書
類 二六〇二三 號
冊 二
函 一七七
架 二〇

聽

内閣文庫
番號 和 26023
冊數 2 (1)
函號 177 1103

和歌 廿四ノ三

177-1103

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

大永二年六月池乃端行越前ノ國乃志原人ノ
ぬきて乃原ノ山なる宇津乃山
ゑさ和乃山よりくく
乃ゝひいまさこゝ行しとも
光のさうなわさよれ中御所
遠州 朝比奈備中守
越川巻能亭ゑ道ゑ池ノ普請元中和漢
乃めくわ六七百乃塚とさゝ去為と筋あけ九
ゑ塚とたれし池ノ去と云物ゑく兵庫代
はゑ河ノ宇てわ水と云尾ゑ中とゑと乃乃塚
河ゑ塗ゝ水ゝて乃ゝくゑいゝあやうし池

国立公文書館
National Archives of Japan

塚めく發句とく

さみだれいせ井の岸の柳水

又南の池あり是岸たかく水ひくこと大海の如

あり凡流池たいふ是一国發句

池の水もやゝ清しいせの江の海

是いにしへ今年先乃事なりや塚より井河へ前

朝比名

海中ゟ巻逆南国乃事なりしかは凡た

て紙といへとも水ゝ鶴乃ゝ乳つき湖

湖いにしへ水海なりしかは乃ゝ数と志て二三百

日にいたれとも水塚出事なりしに五度めとよ

海変よ是小塚小地去河乃ゝ原加竜よ有さてい水

ちゝよやとく力とえ流よ水よ塚河乃ゝ海と

乃川の庵とおもし汲あ乃ゝ原蘇海乃滝ゟ八ま

もあまりあるんかしじさしけ乃わう孫の井いて

河是生んは塚とめゝ是て大成川あ是の熱川と

いあや東面新鄙乃大名なわ海中ゟ巻逆南ま

朝比名

ゝとき て野貴戦忠ゝ治光

天王山

祐山ま 蒲原 屋敷 生塚 配流 遠州

今川一門後ニ号ニ俊左衛門佐

逆則尾張国南ま軍人ま河ゝ と是よ てかく原

原不ゝ ゝ 信濃参河乃国乃さうひきくよ裏ま志

たゝひ又河西村橋場江下野守敎之の敍濱名乃
海南小よりゝ中ゝ水海あり係思ひと云早雲庵
朝比奈義秋 伊勢新九郎氏之一
城中ゝ相談せられ南國諸軍勢うちよせ廿三日
小藤原す
松濱庄 [illegible] 乃大河内城中守 橋江下野ゝ
三河住人源三位頼政末裔 猪俣党ノ祖宗
ふくしてうせ乃ゝ利根長命賢連吉良
ゝわゝ下さゝ志ゝくゝ [illegible] 又
今川民部大輔 部
吉良尉長連義忠入乃時よ南庄乃ゝ [illegible]
度ゝ戦忠美沈ゝ刺義忠城内乃近中江
塩見坂打死ノトキ
て西事名誉ゝ河矢敎射直ゝ則討死ゝ

吉良尉賢連ゝ子吉良尉宗連仰又吉良ゝ御為
清ゝて其舊号をゝ [illegible]
永正元年九月初ゝ遠倉山内扇谷
朝良 扇谷ゝ平ゝ一味河越江戸山内ゝ上戸城取ゝ
ゝ合戦すくゝ小なゝ武蔵地江ゝ [illegible]
くゝ成ゝ坂東諸三位ゝ敵近ゝよゝ
次味方ゝ [illegible] 十余日相文ゝ [illegible]
今川修理大夫 氏親九月十一日俄ゝ義ゝ十三日城中ゝ
為扇谷合力 朝比奈
尉後ゝ西國軍勢ゝ日ゝ源ゝ同廿日廿一日
平雲乃源益 武州 形ゝ源敵近やゝ見ゝ

氏親一族被仰原別之旨乃相賞其うち
武蔵野を深山乃やうに歟味方の軍兵みな
ゝ迷ひ雷乃こゝろく午刻計なると入おひ数刻
乃合戦歟討負て氏親之川より迯其後行方
しらず二子余討死討捨ゆ捕る拍乃具元海一日
一夜さゝく大将海理奈氏親同十月廿日漁舟海
て海原一面日逗留之別熱海湯治一方薩山
二三日陣労休ゝ被仰出ゝ也其時三浦時
神水之所中休わして別神前ゆして同十日より
廿三日ゆゝ白鳥白鷺廿参日一

（頭注：顕定／山内上杉越後ノ長尾義景ト加勢ス越州勢関東ニ出ル初メナリ／今川／永正元甲子）

さるゝ人やゝ多里之ゝ原ゝ氏親
青柳やゝけ出ゝ之海本御ゝ京ゝ
又八九ゝて大河内備中守おいけなゝくゝ
演松左よ打入引る物て南国軍人小百姓
ゝゝ橋爪ら之別家向ゝ度八遠寺居之家数
火左河内及ゝ害変ゝ被ゝ吉原家御代変ゆて
ゝて遠ゝ出ゝ被ゝ氏親ゝ被ゝ氏親恭恐其冬不
恵ゆ病死ゆゝよゝ氏恭幼ゆゝて伯父恭歟
ゝゝく猶ゝ又大河内伝流参河尾張ゝゝ
大乱ゝゝ氏親度ゝ御ゝ義ゝ丹左揚岩寺に

（頭注：朝比奈備中守泰熙／備中守弟／永正九壬申十二月／氏親）

御馬（氏親）ニ乗ラレ駿河ノ国ニ越ス山ヲ
長源小ヨリ（遠州住人）浜名ノ深嶽ト云フ山武蔵ト（浜名ヲ鯨ヲ）覚悟ヲ
又軍人ハ不相知ノ者ハ毎朝乃暁乃星ヲ
ト（朝比奈）ハ御ヲ（義達）ト云フ武蔵国奥乃山
ハ近則尾張海国ニ乃深嶽乃海ハ中ニ甲斐英（武衛被官）
流守数千軍兵ハ〻ニ三ケ月ハ及ヒ世ヲ
為居ヲ世ヲ
（朝夷名）義盛戦功ヨリ南国ヲ為ヲ属ヲ手後甲斐国
武田同次郎年稍ハ付ク氏親（甲州勝山城ニ今川勢二千人籠ル国人別ハ北条長嘆ニ）
（行正月九日ヨリ至三月二日知恩寺村合戦）
又ハ刑ヲ云フ大河内南国軍人ハ伝法乃ハ人ヲ

（義達改名義敦頼松庄引間ニ在陣）
縦ハ武蔵ヲ（天竜川）前後者ヲ
ヲ押領ス其名南塚ヨ幡ヲ（掛川）ヲ
乃数句
ヲヤ世ニハ
（朝比奈）義盛伯父時茂幡守護（下野守）南国（遠州）同族別ヲ
乃沙汰ヲ歳ヲ也ハ麦ハ月下旬坂塚ヨ于向（氏親）
ハ打芝浜水大（天竜川）ヲ乱ヲ
数三百余渡行乃大縄十人共陸ヨ
格乃抗ヲ手句河乃数句
水ヲ月ヲ人ヲ

いまだ人にみるかちに人のわたるのとゆをうの
ちの敵河内のじひようにいく射矢雨のごとくし
数百人軍兵やとくごうちわたるの敵いさるを
引入れ敵乃城六ヶ七ヶ所をせめ落城乃間を
ひこの六月ヶ月八月ヶ月にて責ら所城中そこん
くの軍兵数日をへて八月十九日為長安部山乃
合城をして城中乃箭井迄搦くつて水一滴
なしの大河内先年父子法海を搦取
和楯籠衆軍数ヶ年あり所に討死あり所を討捨の
所ハ男女為引祝同あくらを迄ハ

永正十三年

治承大輔義敦
武清又子細なくして城ら入れ菩提寺と云寄下
寺ハ〜ていれ者共乃人数をのく出家免れ元
遠ヶ中ハ法きしすくく社山二度ヶ所乃奥法
山と度ヶ所に三ヶ度如ハ〜帝代乃不思議
ハやハ大河内領中ち南国より敵する事国三
ヶ度や拾ヶ年ハ南方ら国中法上
意いん法〜く武清御料国と〜て御あつか
ア乃事ハや

遠州
日
日
日

永正十三年入道
九千余人

基氏二男
範国 定光寺殿 法名智心
永仁ヶ〇丁酉 延ヶ 範氏 延ヶ 正和ヶ丙辰
範氏一男号宝林寺
恭範 延ヶ 建武元甲戌ヶ 範政 延ヶ 貞治三ヶ甲辰

範国一男

昌室歴院 範忠三男

範忠延文應永十五年戊子義忠延文永享八年
南國不穏い巻範乃時ゆゑ不分明八十ゆゑ
範忠一男号長慎 武衛遠州人部ノ間八十五年也又今川五ヵ八ヤ
ゆゑ義忠入國子細い河内方若党流領無川左
若廣院乃沒賀ゆゑ御判ありゆゑ入部乃事其
時将軍七郎右衛門尉事将軍家四ヶ浦ニ若党別守護代織吉良
義乃四位海新蔵人尉ニ乃左を結不ゆゑ左
よき條をかゆゑ入将軍と中合入部ゆゑ孔ゆゑ義
第五一年
忠月月を義八月ゆゑ十一月ゆゑ将軍中世
ゆゑ河内井日責ゆゑされ将軍ゆゑ害ゆゑ四
ヶ浦い伊豆乃将軍ゆゑ一族武蔵乃将軍賀守南
横地勝田御供人

國三郎代河内ゆゑ与力す法句賀守長須
郎ゆゑ害ゆゑ也家督ゆゑ成て南國ゆゑまゆゑを
延ゆゑ乱又南方ゆゑ力をとりゆゑ成ゆゑされい安
部乃将軍ゆゑ謀叛ゆゑ山中甲州小法きゆゑ
かゆゑて三ヶ所宮内ヶ浦若党別牧ゆゑ軍兵
を引入ゆゑ山中ゆゑ打入案内者ゆゑ逃責ゆゑ
乃ゆゑいまゆゑ將種其忠ゆゑ又吳ゆゑ左ゆゑ河
ゆゑ南ゆゑ事應仁ゆゑ中細川義之攝州冬河國ゆゑ
攝代東条近江守國氏ゆゑ年稽ゆゑ法きて合力
乃事伊勢ゆゑ貞親左ゆゑ法ゆゑ下伊其忠國乃御判

なを所へきたりて宮内少輔信海近江守刑部少輔
懐行る小五郎殺害せんとすれとも叶はされ義
忠其十二月奥国
の住人蜂起して
奥与羽越不和より討死牧軍蜂起而て合戦味
方理運されとも欲乃出豊ふ不体義忠又義
治而より国々あらく味方此西事とはふよ
ろしひとしてたいとの〳〵討死す三ヶ年
乃乃小弓新兵衛尉肥後守恭宣曽祖兵衛尉三人
病死とはれしてにあらはされ度〳〵乃合戦ふ

理をうしなふ義忠奥国を平乃西ヶ丗余ヶ
小や民親入ふ為理とはいへとも藤ふ乃西花ふ
たゆる事なし冬の乃国吸ふれとはいふよ
味方之田原藤太忠親新宮行綱法守已下宰人荒屋
しを方乃塚うち為ふ城守為朱又三郎討死と
欲ふ塚と持つ恭沢時ふうふ河さ須濱石乃海渡
海して別うちおとして牧軍討捕刑奥那を
ふ反向して鎌川ふ海塚ふ十ヶ〇恭沢捕ふ
して恭能よわるしいとまを後河より下り府中
乃かたうに閑居されとも仕用にいの道すと

今ハ濱松庄ト申ス所ニ仮屋ヲ設ケ良家連ニテ
一夜日逗留南庄乃うら山海ヲ打ハ見さ網
をこの世濱名湖中寺鈴一日連歌を申
水ハ清くして
やさ浪乃あまつそ
ハ仮と云ふ〳〵て西郷宿ニ有れいて越
越後ヲ鈴掛山一日ハ行ヲ連歌ハ
あ〻ちさく宮井ハ
八幡ヲ過て不枝ヲ宿ニ射宿ニ中野ヲ原ニ
ハ中分ていヲ一日連歌ハ
ハく袖と茅原乃うけ乃なる野ハ

ハ國打ハ〻ハ像ヨ年橋ヲ原事ハ
八橋ヲい元渡〳〵寸無ハく国水野和泉寺
鈴苅屋一ヲ名ハく尾張知多郡常滑ヲ世紀ニ
宿ニ一日ヲ留ると云不義朋乃廟ハ宮ヲ
伊勢大湊へわたる山田小ハき俗ハ別条ヲす
ハく立願乃事ハ南宮ハ社ハく名ハ
京頂法師さうひく俗ハ七月下ハ旬下ハ
八月ハ日ヲ毎日二百歌ヲ吟ヲ日ヲ
ヲく出ハ中ハ乃事ハ乃宿仮ヲ国別ヲ
御入ハ乃刻法楽ヲて立願ハ俗事ハ

紫野大徳寺真珠庵乃傍に有し時法華忌也
は其衍として中みや弟一乃比叡白京尾より
中下す

あさ日のかけ写すにめしくのはなかれ　高国

梅咲くいつしもまひく柳かな　宗長

山田乃ぬのし池ためりとくろうし川京領は此
流ねて尾張へおもし長河は小地乃膝行やうくるめ
小なかくたよろのかくし十六日よありひうる
宮津川河野乃津のあすきうしるの年楕乃坊小
て黒乃ちよひたるしたるやうるうあるとは関

民部丞猶今は復返何似軟よまうこいまけよあ
文原七郎兵衛尉盛孝かけ乃津の八幡まうくい
ひあとせ月男平尾乃一宿山田ゐはちら
平尾乃一宿此あしさ夜ねこめく出ほ川の
刈より西ちまうる小坊わくみんれて此宿わ
うら塩たかくみう風みおひくて津川文法
ふうゐへ松浦くとへらまで萱わいてけら秋
此津十余年山来荒野となりくて父子つるの
堂塔あとのこ浅芽よしきの松浦ことよ鶏
犬はみくは鳴鴉ただ猪や狐のる西風たようも

ゐし道の人は皆々へむ〳〵の人はきこえてある
ゆきして途はうしなひぬはかりへ帯てすゝ
佛の御名をとなへつゝ人きこえ給ひけりと此おもひの
河しかはのたのしき寝田といふ不二里道りとて
け川の東中山宴よりおもむく家猶奥で
鶏のきこえ山ゝ日乃出るより不思議よおもしろく
佛返此所の一宿とする湯なとして斯のよの
孫覚よ
おもひの川もとうきうき見んすゝやま
ゆくゑもいとなるらんとゆかし寒

あのこく江別きぬふかき道あるく所にながき
河北沢の鉢塞山称三里ある所も山に入て三
町程ありて新福寺といふ律院乃円成就院
藤寄蘂の掃除ありとそ見ゆ佛の十日
あまねく法其毎日乃起ぬ中にいりて佛道
建頌一座河里
八十九歳乃身ぞたかし　あきの秋
語康川八十九のとしにいふいかなる
なるもとこその身を帰らまやす　何似
會席の神應々息三人十七十三十一秋乃地の

能乃やうにく出立て又こゝゆも年楯軍兵
用意ひまもなく沼別蒲生氏郷を援よ
り近江日数よりなく寄りこ宰人あつま
梁後結乃合戦度くときこゆ道乃やとゝゐ
をあるいせられしと河のなゝ如のひいうハ
河乃高おれ道乃そゝきにゝゝ又山田
小高田なんとゝれい雨風やまて進毎てて
あ川さゆをてゝゝさゝゝゆゆ
河すもゝゝ原とゝてやゝやさゝめん
志ゝあゝゝはこ乃まく活斗道毎ゆもなと那谷

乃寺れをさひ硯乃あゝゝよりひゝゝれを
人何似へ湯へけ原りゆや
いゝくきん屋ゝゝさゝめんあ川さゆを
ゝゝゝゝゆく毎なゝゝ世ゝ
いひをゝゝまゝ歌れ原をなゝ霧田六
大流ゝゝ毎白不白よ
すゝゝ山ゝくあなゝ原ゝゝゝ乃郎
山流乃中高歌音れゝゝや越前人流流れ
ゝをゝゝあれい志ゝ原者を汲中湯くゝ
乃ほさ原河中乃津を近ゝ原里流屋れやゝ

仏道をきゝ初め侍ると聞て又乃日八宮京
盟孝ゆゑ心ゝ乃人と海て這毎に津の人ゝく
ゝ為に遠く遠旅あり
かゝ仏世は松や志ゝなるあきゝ乃うゝ
山里もとの津還俗のあゝまゝ事なるゝ山
濱乃夕たゝ方おゝ聊こゝ仏をゝこゝ仏路毛
浪の海ゝゝくまをもくみゝわされやゝらふ
ほゝにゝかゝこゝゝわゝの流浪ゝ可よゝ生きる仏
酒者毛ゝゝなゝとをてゝゝゝわて奥ゝ入ゝ
かゝをゝうの心を紅葉もなゝの京毛ゝくゝよ贈答

志ゝく
こゝ乃ゆゝゝゝれをゝみゝゝを河仏ゝれと
うゝの山ゝゝや乃心とゝあゝゝゝ乃
ゝ入ゝゝゝ乃ゝゝゝゝゝに浪は松乃花せよ
ゝゝれゝ乃流いゝゝをゝあゝゝん旅寝ゝゝゝ
ひゝゝゝゝゝゝゝたいひゝゝゝは
たゝいゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝ乃せれなゝ
ゝきすゝゝれゝゝゝゝゝゝやゝて
九月一日ゝゝゝゝてゝゝゝゝゝゝの波乃河
ゝゝ毛酒ゝゝゝゝゝゝんよゝゝ道をゝ見

て宮津川めいとうの船舎大師堂数京乃
使乃山伏弱おひ文とも乃ゝく平尾ゝ宿へ
使ひ一宿乃あしらみおそうしく
こしら歩なめうハあるとうゝ見せう
名い宮ゝ人ハすうやまう郡
豊孝ハ一宿とも少せけくけゝ乃美うを
せゝ郡ゝ多う田二日ゝ山田へ海うときくけゝ
ゝ乃猿乃光源を書ハ行ゝ郡なゝ
同月廿日河ゝう田文乃建国寺ゝ海うとく
西乃岩ゝく枝上人乃四社名語引あうとく

五十嵐みもすう乃ゝ意とうの山田ゝあせ
乃細みう萩ゝ高ゝ霜うまけさゝ入うう
西ゝに心乃うけうの山形ゝけひくうの
世なゝゝ松乃柏行あゝ人ハ遠乃ゝう小ゝ
十余人計紙の衾麻乃ゝ行乃ゝ書きひのう
ゝむゝとも乃人ハ板よれかゝて西とう
うゝゝこゝ
きゝゝうみハ高ゝあれなゝいよ
むゝれ河ゆハすうまひうゝ形ゝも
松ゝきゝ乃ゝうゝにゝ川け海ゝ行ゝ語

引出人〻数白雨ふり

秋はつ　神護のたくみ　岩の夢

春いかつ　乃　ゆ　乃　ま　川　の　波　建國寺

いさ　道　を　上　人　乃　田　歌　の　面　う　け　な　ら　ん　十

月　よ　山　田　は　さ　ら　て　多　家　二　日　三　日　逗　留　連

歌一座

神　な　春　り　み　ち　を　ふ　か　き　除　ま　き　ら　れ

泊　瀬　み　ま　う　ま　一　日　言　伝　わ　し　み　ら　や　く

京　に　く　知　人　き　て　わ　く　伝　る　ま　ら　ま　て

加　へ　ら　ま　し　に　や　し　法　の　う　し　待

そ　川　坂　山　い　の　あ　ひ　乃　ま　ま　ま　ま　く　に

じ　ら　と　い　ま　乃　ら　も　わ　ら　れ　し

西　武　器　ら　の　る　れ　乃　ま　乃　誘　引　み　法　き　く

世　山　て　西　こ　と　に　き　し　ら　の　ハ　ら　れ　め　れ

と　ら　る　ま　法　の　宿　坊　安　養　院　連　歌　な　の　夜　白

志　ま　と　あ　や　本　す　ら　ま　た　し　源　れ

合　去　七　島　東　文　く　き　て　の　童　形　な　ら　ひ　ま　く

酒　東　的　ら　に　な　ら　ま　聖　日　橘　寺　一　見　し　て

大　和　乃　府　八　本　み　一　宿　あ　く　法　日　白　ち　法　服　澄　英

此　坊　み　一　宿　又　明　法　日　南　北　千　ま　院　澄　英　同　道

連歌有發句

冬やゝ川わたる風の冷まさる

一日あまたく道場院十日あまり宿坊連歌

發句

心湖に月やあらぬ乃影のゆきぬる

道場院にて

ゆき迄に枝あらぬ花乃ちるみち

大佛ゆきいたる道ゝ山路薄へまかる乃

分所門道ゝ礼ゝ道さゝ礼めゝて般若寺坂

ゆきまゝ所杉食料牧志ゝ須坂乃松のゆふ

為宗氏燒て酒あゝめなゝて奥よ入谷

ゝ宿坊ゆゝく出立北數盃坂ゆく家内よ

ゆゝて勝氏つきぬ別

世ゝこゝ枝ゝきゝゝく鹿ゆを

ゝゝ乃ゝ乃ゝさゝこゝ詠ひぬ

さゝく薪刷思居ゆゝくゝゝ紅葉に

て尺八吹酒ゝゝ乃山蓋山乃時流水象ゆ

洞院芳殺寺宗野大紀院ゝ乃ゝ

ゝゝい和泉北堺茅居尺八乃中子ゝ

法牛法要糸宮ゝく長河打姉ゝ山田小

遠藤弱兵衛十日あまり長河ハ山塩薪へ
乃りわ〜なわ書兼もてゆ〜ゝもゆゝ
関元〜ゆゑまをゝん二見乃浦ハ浜小ハ
ゝゝとはゝゝきて
ゝゝゝゝたゝゝ浦一曲いゝあ〜ゝ
ゆき〜ハゝゝんあれうゝれゝや
南部にゝくはゝゝきゝ事なゝ〜山田へ
ゆはゝ〜ゆ〜ハ尺八物ゝもゝゝゝ紀乃事
ゝゝゝんゝて妹乃尼御流ゝひゝゝゝゝ
はゆゆゝ乃ゆ尼はゝゝハあとゝ川ゝ浦御とも

乃ゆ尼とゝん酬恩庵を庵きこゝめ
とゝゝれて三条西実遥流愛ゝ
ゆわにあゝ新ハゆゝとゝきゝゝ
文乃新の名ゆゝもゝゝゝゝ
はゝ〜ゝゝゝゝ〜ゝ山家乃名とゆゝ
はれゝとゝゝゝ薪乃やゆさゝ
名ゝゝたゝゝゆゝきゝゝゝ
京頃法師津乃国へ下ゆゝゝゝゝ
清凱法歌乃ゆ〜ゝ国乃森ゝ初風新ひ
あゝれゆはゝゝ〜ゝ

君をまたいかにまつもの山やまちの
岩田流もちの山水けたる夜
酬恩庵にて東湖の神ひさわとも
いろ〳〵歳暮りやと心乃祝おほろよ
神のはくいかとしけ雪のたきて水仙
みゝの雪ふりさらぬなん
明日正月酬恩庵にみ道遥院夜詣
送別一立首
東にくさらによひもの山へ
ちりのなりなるほじく寄

いとはやもとに乃ぶいよ松さとの
ひとるなるもとるの乃うくひ歩
明けゆき清こうの夜ばこう詠にく
ちとひしんやまの乃ふ松ふ松
山人乃松ふ名にあるたきをは
ふれのうけあもゆきてやうくや
ふもいま嚴ふあさひしたるふく
乃ゆのふきてもひろひもぬ所

右率述早懐呈紫屋老人　神祐下

大永癸未上巳後二日　道遥子

題詠中結題

をれば　うらむるかとうにく
ちるものかうとは　まくみなし　○はて
たとうの　はるかの　はくなくなる
いさきら　言のうたに　れうくひ　歩
川ことうたりひや　ゆめのまの
くるかの　大元　宇治のうたうか
やとひへきけとうか　くんてきむ
たきうの　花しさはて
あさゆふの　うのまれたきていくとゆも

よりひくをか　君うえろくん
京うわかうと　文れ　わ　お　恋懐　中　道
老ぬくをたりふこと　くいたふあそ　乃
いまいのかうれ　なくさめうなれ
たなくり　西　身　ん　ひ　ち　ひ　ま
為うしに
我よりひとりを見　をう　あ　れく
こうくれいうちう　えま
本津　を　一　を　お
やまとびゆきけ　乃　水　い　川　川

南部より取寄せ小
うめかえ所ゆかの後いくうはくのいろ
うくひとのいとまよりの間柳の乳
梅の池小路護国寺の堂少して久明友あ
り不居をとゝめひ寄くゝ十来よりのまわ
枕なくゝ小いっにもいきされよ人ゆく
時流乃時はもわうさわ小
かうまくゝ古ものもひ川もいたとても
時しゝ時流やかを梅乃称
宇治白河別取辻坊より年始乃吉伝と

柳一荷梅一はけ桶二青梅はけ桶なとに
ゝ人ゝ
ゝ所さめ乃家もゝれぬ心さ
いと細橋乃やなしたゝやゝ乃年
也しに扇なゝへて
あさみゝの柳よむめ乃二桶を
ゝあけなゝとゝやすゝ
長河内子取菊唱食はけ小国とゝれく
やしなひすゝきゝたひく乃文はけ乃中
ゝ見出してゝのうゝ紙をしうん乃

御承範十三幼ゆゑ　て加護て新心傳居よ
ゆゑ能婚因情寺後宮慈香禄尼ひとり
とう居所を御ゆて奥乃方に出
ゆゑ

家けさいたくゆゑ小やしなひ乃
はくれいゆ乃御さかゆゑあと
京さじ小を入ぬ　芥川ノ城主
御ことを幸ひ　御わ　なる因情寺
の果見御乃芳恵遠御退居乃たの東山安
養寺小　てゑ白れ　ひ　ゆ　頼則

歌連哥なゆさわ乃牧寄なるわ　ゆ
なる道を院変中　て肖柏禄師京禅法
師寺町波く泊紀河原林剃る寺なと所
波ゑ小御重乃事なるゆ　ゑ白歳十
月小ゆれ　ゆ　ま　かは　歳ゆ
慈香禄尼は事なゆ　ゆ　ひ　御花を
やしなひゆ　ゆ　ひ　れ御乃事ん
三月薪ゆ出京乃御丹毒小宇治白川乃
別所辻坊小　て
ゑ白や　御　ゆ　ゑ　ゑ

牡丹花

さいこひの巻はせをやしひの寺なと
の巻は有京のくにの紅葉かして
うゐせうの巻は花さくさくせの郭
山科より百里か
いく岩根をとる船の流れ川
丹後より百里か
松さくにほうすきに浦やよさのうと
同三月か
にのひかあひぬうるの海をとる船
人の年忘のうふひか

花かてふ百里にむうるる船の後
三井寺より百里か
郭公
奈良より廿里か
宗鑑大徳寺山門造営の事門徒の老僧祖
心禅師越前一宗深嶽来朝より京都へ帰り
くにあいう宗所下へきよくさく三月十
六日か一宗に下る御舎利教京造営
の事申届くさよりくさく申届け給
宗祖もなくて祖心遠行後あとより別後
河へ下くさ聖と所に未練居りは造

當乃事大功成就し先うち勅願
て長河寺加乃用意を新妙法寺惣門修造
乃外浅野播磨守殿山門乃事ハ世尊院乃家ノ
主殊唐獅子入来有て寺乃庇破れ越
前殿下寺加乃事再興とくきよう敷
京都之ハ修造うち寺ノ事ハ一つ迄ハ
いうといふひ法れと移庇破乃さうろ小
ものを殿下教京之百丈之御法眷中二百丈
余ハ調つ迄といまハ京師世ハなむ主様
唐用捨いまハ京ハとうろ尼ハ長河

寺加何なるぬ拾法部寺面ハまつく凡三百丈
ハ小とうひ法うち寺本堂ハ京小
あうしうう生国年来美花和尚にうち
尼ハ長河寺加乃金方として去ハ寄付月
ハつく三百丈寺納修切あうハ新寺納一事な
とうとうを越前道面中殺生
行ハくと本寺ハ乃ハ乃ハ
面ハ花たううし乃さ身うし
昨雨軒ハくく庭乃石本寺法新面ハく
ゆううや面ハ世ハ水乃岩小ハけ

面うけハ梅こうはけうこれ一茶うの郎

宗祇年忌よ

松むしやよもうりのあさうの忌

ときすきあり野うけのまつ茶

八月十四日

ありよいみてらんあさの茶人面もの

平泉寺うり百姓小

雪をきてしゆ乃月乃あれ

越前うり乃かつ　対江州観音寺

みて

あさ雲れ和尚屋面は八重九時まれ

うやみ分ますゆうの郎　湖戸の郎

麻乃苔や高ゆ　ゆ　茶

志賀うり毒

秋乃うち紀さくうれよ特の郎

義仁乃坊の津流高人京小く無ゆ

祇乃うへ流ほ何美乃夕郎

江象の坊門町小く

よ屋い乃湖戸八霜乃板屋の郎

ゆ乃湯治の法ひてよ児屋寺小く

さるうちにわが野と雷乃あたり
ものや京よりさもうまうまうまれすれ
城山能坊源次郎より句ふ
言てなほ出家けれどうまれひろふ
越年い蒙刷恩高橋牧寮下植色六七人
あれまりて田楽法師乃はぬて那珂度よ
あとの方なまうきうなるうめれ
ほうしいれのくるのうれよ
ちうちうちうちんはあらずを
るくうい今ゆくうんの源九郎

引つ連れてを祝ちうすま
津乃くるの湯れ屋海のれ枕にく
言野ひしれ屋れふこれ
なるの東乃や重うや豊たちいて
ちんあ寺乃れ大乞食とも
こうあうれせちべん坊や文珠あん
風情をけうくむきや重ちん
人ゆ屋とうるうちまにうち
ちこうはんるの祝くのあうれ
まうしるうあ屋れ河の水ふ

しうを法者を清えぬうち清
もろとふこそ思きうしなよつまく
なんかうこ所まてこそ外よ者い梅を
お菓乃川樹うえこうすくこよせく
小望遠うれくるよとうす所
ちこ小袖柳さくこ成こき海せく
小やけのたうちいたくきく乃花
秋風乃吹上にかよすうこ
小うぬ一を原をとうわう沿
もてみれくう乃ち言こうきこくれ

一帖二帖けうまとひとう
ぐきてを乃あきく風小なひ海く
ひこのこうをすういぬれくう
ふりうをおひくれくを原う
お条あうふたて原あまう海
を海乃うまきこなうあん
れるいこうう三人あれ
波男を二てひを原くう乃う
おうう乃を原にをあきうせう吹
を乃くなくうれくこれ原あ抑よ

おもふるふはもりてれこうせね
うもゑよりんふくもつ社やとゐまん
人乃なりけやあれにあるる事
ゆんきこうこくとうきすて
あのじ多浦あまつまなや
ゆつらんてさしうもいまとやちくとや
わまとうもせいたう多流浦ひく
不動もこひふこうつうとあう
神乃代ちの乃とゑれまんこうち
ふとや姫原三瀧山もものちや屋場

姫川ちひつじこうつ
ゆやかくとすまこうもおくゆりひ
かうこまうにゆまりまと
うたちかたもくの乃河まも
るに乃まうふ人九成見ま
ゆもにゆ中乃おゆこひちわにく
とひたうんくとやうう河ん
高野ひまと乃あと乃やまとりし宗盛
かう野ひまれさきの乃ひめこう場
五句ハをひたうんと云心付もちう俗ん分

碁をうつ乃うへよりふかい木よりたち
寫乃巣こもりといふ花ちる色乃宗鑑
鶯のなくすゝまてゝ花いる前宗長
道も五月付まさるうゝ行うん
大永元年正月一日新刻題歌道世
者ゝて門和ゝ巣内を尋ときて
あゝ世ゝ利ゝ人ひきゝ一ゝ世ゝ
ゝゝやいゝん小沙弥ゝやいゝん
試筆於刻題歌流を尋ときて一首
七十に七ゝ世乃ゝ成くゝ重ゝ

光みゝよゝ世乃ゝ那ゝ
能答業尼老人年以試筆和哥一首

紅鳳

行末ゝ猶ゝ能ゝ世ゝ乃日仁
君賀齢を鑑耳　義見与
於今正月十日ゝ丸歌ゝ人ゝ
中ゝ世ゝ世ゝ行を祈ゝ世ゝ
見ゝ者ゝ我ゝ世ゝ出ゝ世ゝ
幾乃海世ゝ
山幾乃海世尼ゝ

入給へなれ〳〵し
中御門殿より
宣綱
さむしろ
さむしろもこゝろやこゝろ乃まにたきてをは
ひろひもてくらすやまさとの雪も
同時に紙に仙甫雅亮以一首を美詞よ
句余老後再會会所雅亮短冊
宿答申給
出家なれやこれみらふたきてをは
むろひろもてんを乃やり人
れ
十四日

こしくれ
こしくれもあやとちらへ乃あさうすを
南殿より
南殿より
いけくもの
いけくもの
八幡梅宿ふく一折乃奥りよ
梅乃ちれう川乃ほとりにて
来ふ入て児共流あまた酒宴老嗚こと
所入給へ
所入給へ
ちあまりの
ちあまりの
枝ふけくいう
枝ふけくいう
たりひやま柳乃
たりひやま柳乃

ひさしいようにきくこのはの
やうく酒の席旅せられ夢せし
京より帰
おつさゆきとなへ玄乃ひろの邨
三井寺勝義坊京みやこく奥りあかの寺
ふく寺に山のくいくうるとたれも世
みや
細川高国
霞頃一日ふ句よ
なひく世は面乃ひとうなる茶茶の邨
三人ふ句道を流変宗碩月村宗長別種村

中務亟於月村訣漫行
うくひとやおのうめよりれ茶やとう
老雅亟乃茶をくうれつて紙うり
只も我も不老不死乃くとうふく
まるおひうんをこうなるなる
亟
こうやこれこのくもりあくとう
いまもおひせ地茶こつくう宗茶
ね中へくうをゆるれるとう
中海門変ふ

光乃こゝもまれなりと志るへ
田子乃浦なるたちハゆくゆくも　宗光
はるゝ

宗よりの田子乃浦なる光乃那と
たゝひしたくぬ日をうなるん
御舎太郎殿教京宿乃庭乃舞乃事
ひとせめとせう家させくさをもくめく巣
をくせ大小二つまとに不世盛乃事なるを
こゝよりたきく舞乃記建仁東堂一記為
欲なるもこうしく侍ゆ

宣殿法名

まこきうたこうえ敷やゝ乃巣なるて
巣たくせうも侍庭乃まりうえ
尾張國知人さそふ文くひくあるを志ハ
逗留をうやうになるのをなるに卯月十一
日京ゆ立くゑんう乃旅行まりゆ故乃を
なゝ八幡をき前刻思居一体和尚遷化
乃ゆあるを波うゆ乃焼香ゆためふをう
ゆを京ゆ知音ゆ人を上ハ下京まくく下ハ
法性寺御茶ゆあうまくうまくかくつをよゆ
をくんくく立わうゆ侍ふ

なりとぶらひまゐるものかんこやこ人
をとゝれしく祝ふこゝろあるをもてな
されつゝ詠乃結句能瀧一峡乃新人といま
をかわくるゝ人乃事なりけり伏見
津田海前入道うしく物語する前
乃山桜本は津よりと紫野へ車乃事を
加申とゝ人ゝ日もたくいまく小付
て宇治乃川水さしれかんといふよ殺句
取申ふ

それ行乃なゝ物ゆいつまゝ代ゝ乃ゆ

山取祝ゝうるもゝ此津よりも宇治橋まゝくさ
しゝかさすれ小水乃苔豆ゝ清水八幡山
本津川なゝ道あひくゝ水ひろく湖水乃こ
とし京よりいさなゝれゝ人ゝ水ゝ
をゝきて八八宮峡なゝ宇治乃川
瀬乃水車河とうき世ゝめゝ新なゝ山こ
ろゝや宮こ奇與小京し清水乃殿乃邸
汀乃杜若峡あひくゝ松りゝ乃ゝなゝ
いく瀬ゝもなゝ紅ゝや瀬乃物ゝ月ゝ
淀ゝ乃ゝこゝとうゝ吟して水さよ

せたゆ〳〵しく乳心なくして東八幡川別所
辻堂一宿あるこさ水鶏のうちさゝなく
あけにあるこ井なのめ〻ゆかしやゆ
那須あるゆ〳〵南国守護所東雲軒影
乃美乃乳といひ付ゆ所乃酒宵一杯の
所あり加といくゆ乃と数句
かゝきたるやあるあさ日やゆ
乃こ乃所乃ゆ〳〵乃ゆ〳〵刷毛庵一東山の
林本中禅へ十三日小新芳焼者こ白三井
寺勝義坊とゝくある来法師ゆ去京へおく

連歌興行河乃ゆ〳〵なゆゆ法師おあれく
大津乃濱猿宿乃湯川東ゆ入く上光院相
別箱根別南童形二ゆ三ゆ住院ゆ去
滝度芳新乃盃おく東文ぬあ〻所あた
院主一杯乃興行さゆ取なくて
郭公山乃井のあるぬゆ川音乃乳
むゆ乃ゆ乳ゆ〳〵くあにゆ乳ゆ乃ゆ世そう
乃乳乃〳〵

昨芳新

いゆ乃ゆ乃〳〵さ宗所ゆ乳ゆ乳
こ道ゆ最あゆさ宗所なゆ乃ゆ世めや顔

一面半時ばかり下京後見の所にて少し晩
人にかつしてと胡桃茶あひ興有し事や
一折とて〻盃九次ゐは寺乃老僧八十乃枝ち
列く京参場ハ八とを来給ひ八とを者れ
く平調一を二をとをちゆゑとて〻れ為
にみくそれ切〻し後成八十ゐたれ切く行
ゆゑて百首乃歌たくまれら是一中に
よもきうりの松むし乃音をされかつ也
れ切為来明〻てた諸宿大津へ帰り行を
し十ゐ日ハ京を宗堅さわとて小〻て志

きちゐ小興ゆいなひかつくて
よ所なるやとそれ乃やとこなれ乃海
枕をとの浜さ〻にとれとみしとをなる
連歌半小ゐ中須大和乃本乃浜ハあ乃宿
所ちゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃
〻〻〻く漕ゐ行ゐ小ハ京ゐく後部宿
乃興ゆゐ
いかゐ〻かとゐ乃やハ〻ハ夕月来
数乃をひゐ本行ゐて〻ハ寺ゐく
月ハなとまつれ乃をすとをひゐん

けみ屋より乃とくい毒うつるとて
る哉集乃ゑまやまことに毒もなくた
かくはかりなるを東より入てうれしき風流
時とうあやとくとわうとを東十文
乗乃海とかう意なるぬ光うとう山うち
意ちれかりう宮み境ばうけ宮やうみう
一日ほのとくく又乃日の主頼
舟乳なくもとう苗ほこ姫あさ戸うれ
河井後河守乃ひうへの家内を乳山を乗
かくう乃山ばうくて四三日主頼あり

印乃とゑや見ゑ山れ宮ゑくう乃ゆき
釈尼寺うり程村中物思の主これうう
迄後河守息市乳同文印主宮れもう乃
く乗ばこぬ廿二日とひく抑茂あり
加と乗ゑ思ゑ乗麻山乃坂乃下まて家内不
同ゑれ宮ること程ゑのうれち山内れ白河れ
乃白河う移くやはくへをうまとん酒さうる
山中れ奥ゑとれうう一ゑく道わ乃人知く
ゑくとうひ宮もう坂乃ちくうる道ぬ乗山
うう又家西ふふ日れ乗略体息うれ乗は

坂乃下は旅宿は山乃じう社宮の浦下乃
杉之あ〳〵のうち唐なのはなりひおれ孫兵
時分さうかなく
すのやまし山ふ鳴けはかゝきた
やこにいつあきかんと思ふ事
志乃ふ鳴はくは思ふ人ふ鳴ふや又ふ人ふ
山はこゝ程とて
思ふやまうき世はよ有よ物のすて
いつあなるわく我ゝ身なるん
うゝやゝ清原ゝうゝ
すゝの山姫ふ思ふて
光ゝまれ為こし我ゝ迄
那須は奥ゝ又河はわゝ原とて
ゝふわゝ原新ゝ川きすゝ川
やゝ那乃清はは光乃志ふよて
其日乃ひ原かゝとゝうよ亀山ふ付如旅宿
ゝ野村大然やゝく風呂はゝ河細沢那日
響山西法寺ゝて山庄育宗野乃門流祖ふ
十町ゝうゝは寺〳〵作者乃事ふ法ゝてゝとゝ
廿三日ふ那須ふ出ゝふ有ゝ有ゝとゝれゝ

らぬとみくしゐをてゐいハれ姫一面を乃元
ゐ文乃乃山雨ゐ前ゐ乃山ゐ紀叢たうく
若姫うく杉松いく村とを乳ゐ寺九さ雨言
雄山神護寺にを紀ゐ先さいゐ乃寺
大珍寺若乃ゐめくゐを猫ゐ乃梅を紀
れ乃ゐ紀叢ゐをいゐへゐやまことに斧乃
柄をゐゐ紀くゐ西法寺長を猫新河鍛
路四以下孟ゐ乃流酔雨ゐさかひく叢山
ゐ乃ゐぬ想羽日いとうく晴ゐく河紀神流
鎧ゐ乃頭猫飯ゐ乃暁以ゐをひ河乃紀

乃しなり又を頭奥乃変句をとくしゐ乃
秋京へ乃ゐ乃ゐ紀井てゐ一れ乃事紀ゐ
やゐの紀乃みれうをたゐあきの工忘
ひうひいゐくくとをひくいるひ紀ゐうハ
こ紀うひゐをとゐ乃叢をう八重梯一雨
れゐうけくなるけやゐ乃くき紀宴
一日をきくく又一れ
うをくこうれるいく今年を園乃行
又二日三日ゐ乃をて西法寺決河ゐ前夕ゐ
乃一宵岡道以下風呂河ゐ又乃日響乃巣

山みちとて家毎河紙漉所苔細石なめ
らかにうへよりこれきこゆ谷ひろくきよ
して入江海乃ごとし若きまくしたるが
ごとき岩もありしハ此とまうすむかし山寺の里
家数となん年楯乃周ミにやをれつゝ
乃叢を楯矢ムる門ハ石を棟柱日本十
町谷めぐりくまる几数万軍兵此とまじり
へ郭ともをこ所へくもぬすれ其日正清る
乃なりひ興福寺是ハ東福寺門徒僧持和
漢張行河里

もしの花さむやまやにや咲さかへくきよ
人如又月涼
一折乃うちよ是盃ハてて沙唱数盃みゆ是
て帰浴蓄りなをひきし又七月廿五日
月次清楽とて催しみ慈恩寺此とふにゆく
又月毎にまをけ乃水の上来業乃那
又廿九日ニ新福寺ニゆく
侍所妻はちれうらうがなき清水の
是ハ宮師種盛乃代
六月二日於何似一演十五首息次師盛

祥の頭集乃内書ぬうもてく南産又寅成
おく教訓集文ぬ人めゝ扇をりのゝ給
河にくも立てと百首小
たまはうもなとはいんなるくと
君とわもとゝたきこ乃まり
扇乃浦松ゆゑ七十八七十七
熊山藤宮地村大物ゆ出ゝ屋をひと
川加竜小入くゝうゝへきためゝて河
ゆ不沒ゝれしさ乃あまゝ小藤宮乃小屋よ
水ゆ桶小ゝへせゝとゝ面せゝて

なゝけ小ゝゝゝゝ三給ゝゝたゆゝを
相小立ゝとゝゆ

ゝゝゝゝ家ゝゝゝ川れゝひこ寅
あきゆゝゝゝゝの水ゝにあまて
河仙決鬼治郎正祥あ新野ひけ給
ぬよ藤宮をこ面ゝゝれゝゝゝゝ中道
ゆゝ

人ゝゝゝ元乃おゝんよゝゝう
けさいゝゝれてこゝ海ゝゝ郎き
返ゝ

此何切関何切トテ尺八ノ名物ナリ一ヨ切ノ尺八

おほろにもあらてこほれてたりける一ふ
ひとよきりの笛くもやなりけり　正祥
何似斎にくは月頃よしかきとしに
まのくらうち見日ことに出てかく
なくさめにかくおもしろき中に
神部右京亮盛長ありつる乃に一よ切尺八
関何似斎一族ナリ号ニ神戸ニ平氏ナリ
聞あそひやりて見せけれはうら紀
よしや清通はさうは考へきよしいひは
とよりと文してまうしつかとて
何かの友をえらふいそのかき

ありのしも花のかけはなけれと
人のもとより篠ちまきせんなといの二つ
をくられしに
うとましやよれたけはさてちまき
からに千秋千年いたりしを
孝盛祖父俗名賢盛
松原宰相入道宗伊百首歌亀山にて自
筆一巻おくりしこをしたてあらため見
せられけり一帖を返して写くなかには
その宰相孝盛とこそ仍はつら
いまも世は何もよろめいのう

市ゝこの夢やゝひなるゝ事
亀山は慈恩寺新福寺阿弥陀寺長福寺
等ヲケ寺名律流七堂みゝゝゝ宿
宿江東西市ヶ所
すゝ小尾張乃国へとかりひゝゝ海道
後河ゝゝ使をゝゝゝて二ゝひ文とも有
清文問て法市中合同道ゝて五十海へ
きゝゝゝあをゝゝゝゝて亀山
京へ人をひゝゝの夕ゝ世河阪決ゝゝ中頃ら
をむゝゝ乃史俗るゝ六十ゝれゝゝ乃ゝまゝ

今川氏親病氣
清法印ヲ招請
故ニ

ゝゝゝ山坂乃下ゝゝゝゝ中ゝけゝれ六有
ゝゝ日亀山下ゝゝゝゝゝゝてゝゝゝゝゝひい
ひゝゝゝゝゝゝ一日休息七日ゝ森軍伝
道ゝ小ゝて伊勢乃尾張乃あゝひ乃渡
何紙ゝゝゝゝの道ゝ乃
ゝ。人ゝゝゝゝゝゝゝゝ道
ゝゝゝゝゝ
ゝゝなゝ法乃何ひゝ海ゝゝ
ゝゝみゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝなき
亀山ゝ十日ゝゝゝゝゝひ道ゝ時ゝゝ乃
何仙の美志雄神乃あゝゝゝゝゝゝ六
月七日尾張智ゝ郡天野の隠宿八日小

参河苅屋より小野和泉守宿泊一宿
同国吉羅一向堂一日逗留十日小今橋牧地
田三一宿十百姓吉兵十二日引馬伯耆
守殿一宿十三日舞川一宿逗留十四日後
河藤枝長厳寺十六日府中流れ少立
して宇津乃山下り面やとりは茶屋じ
うもの名物十文ことゆ一杯ゑ十
ぜんなとゆめらうれとゆ也と
茶よ入ゑ茶府一面日休息ゆ日後射面盃
三献通御乃服沙茶ゆ事遊百検乳乃

清法印

今川被官

氏親子息氏輝

事とうゑ志ゑ清見ゑ関乃ゆまゆに又
京ゑ日同道乃人ゆひとゆなひ沙ゑ事を
先行ゆひせんとゑ向奥浦茶屋厨正伝宿ゆ
いゑ日七月廿七日は城乃夕闇まうゑすく
宿ゆて
なゑれとゑとゆやゑゆけく岩沙ゑゆ
城下乃みちゆ沙てゑ安いさゑ也大
廿八日京ゑ日れ人ゑ乃ゑゆは城ゆく一濃
三十首頭三条西府沙立国中うゑて

実隆公

張行沙ゑ日同沙諏巻ゆ小原親ゑ城よ

ゆいひとをくれ
まいら筆と約乃あるなをまいて
きよみゝ世ゝよ　ゆ所ゝ　とをくれ
返し
ちさをもしをわたれなをゝ光乃なを
あさゝ川しゝ乃ゝ　ゆ所ゝ　をなまく
廿九日宗祇故人光を南坊下向思知く
ゝよあひ結をハ筆忘れ一ゝ場ゝ
ゝりひいゝ所袖や実ゝ月をなを見
此心を光をひ寺ゝ　ゆ　ゝ　実ゝて一

折乃愛句
月ゝ行く袖ゝ実ゝをきよを海
ゝりひゝ所と云題なをゝ　新古今よ
見ゝ人のゝりけをよきよみを
袖ゝ世ゝりをなをゝをひゝ
ゆ歌ゝ寄ゝや宗祇ゝ寺ゝ一宿ゝゝ
五十八年ゝなをゝ如一ゝ乃ゝ行ゝく寄月
懐旧と云題歌
月はしゝやこゝ世ゝ孤なをく七十ゝ
三年をまて乃ゝきゝしゝかゝ

山寺中瑞雲庵塔ちかくよりの見枝ふ
て勝れかくさせまうあるあるあるあるあるあ
しあ京とあるあまるあるあるあるあるあ
みくもくなれまるあるあるあるあるあるあ
雲波ひて京乃人ハ山寺性海庵乃ちう
京ハ遠ひとく京ハ庵ハひとひ十とせあ
まりふやいまハなき人よて墓一基あ
とみく
むとひとくきまよういはの草乃いは

あるすやなるるるるるるるるるるるるる
正廣先生下向又ハ城より場ひて三原
う濤あるるるるるるるるるるるるるる
月なるるいくせの濤ハきよんるる
せくるるあるるる実乃ひるる
あるる塩乃根ふ出つはるるるるるるる
ハ其根るるに根るるるるるるるるる
かきはけるるるるるるるるるるるる
るるてのるるぬなるるるるるるる
山寺田源乃坂ハ等持院尊氏彩雲園さ

へ葬れるうちにれいまそれ物して如
く悲歌して

きよんうこ寛乃あうきよ所作
じうしかう場くみうさう元年下
なと積てかうきく後は相伝結び箱
みれ長禅寺義堂和尚
世にうさされしかを九しく法訣伝えら
きてくと有しか
立川流つ也部にうしきよんう
ふきうしかし寛乃あううき

は訣と箱乃如るかまきゑよさうせく自光
あ乃しそハ能登乃守護みあ乃とな
義堂和尚
年故場して十三乃童ううしまこ
ハの是節とうう乃は又市川宮ふまて八朔
乃日一杉奥州桃年故場
うやしそめくいく松乃うれ萩乃家
は心ハこ乃童うを松の是節を迫乃志うう色
うう乃廣義して松ちれうやしうめ乃
さの萩ハ万葉やらひうかや萩ハもと
ひうみきくよせうう所乃松形れやうに

よめ新ゐや府中ゐうゑ屋て京ゑ同乃
乃人たゐゐ異可
さそいれい新乃ゆ
いゐは山さうゐ屋ゑ乃なゐい新乃不見れ
ゆ乃雪なゐんとゑ乃ゑ乃なゐ八月中旬
ゐゐて子新ゐゐ新ゐゐ屋ゐれく明ゐれい新
ゆ時ゐゑゑゐゐゐく
きくうひよひゐゐれいゐゐゐ
ゑゐきゐゐとゐ
九月乃ゐゐめゐゐゑと屋ゐ町ゑ新ゐ

屋さに為ゐて生ゐ有いゐ右乃ゐる
ゐとして
いゐゐをひゑ乃ゐゐすゐ心ゐ屋ゐゐて
ゐゐゐ屋ゐゐ鹿乃ゐゐゐゐ
京ゑゑ乃人ゑゑ乃しく新剛屋居乃屋屋
屋乃ゐゐゐ屋ゐゐとゐくゐ
あいゑゐな屋我ゐことゐくゐや山ゑゐ乃
たきゐゐ新へゐ七十乃ゐて
剛屋居ゐして絶写乃事ゑゆ送乃屋
心ゐゐゐ神宮乃東ゐゐ奥屋ゐく屋

湯乃湯治のはなくふは塩乃庵の山水は
殺生禁と而申あり
見すてひみめうまぬ庵の末草うる
七年乃春浦くに河とあまとそこつ
大永六年正月ちめふ詩歌発句にて
獨吟
君乃うちの梅さく庵乃あるふ
ちりぬ花乃日とやまりのうちゆ宗長
あるゝ玉乃ゆゝしのいくまうとひん
伊豆国河野乃浦ちゆ而申ふ

あまとそこ乃やあこき乃うちゆ松
甲斐乃国ちゆ人乃而申ふ
ひとゝ乃ちゆ河やあさ川ほ乃やま
河色乃富士よりて
正徳やうれ川とすめ原ちゆ乃あ
興津ちゆ山乃塩ふく清見乃寺乃ちゆ見而
吉野ちゆ乃ちゆ見而なこのうへ
三条殿御方内月次乃
郭公まつ乃寺ちゆ桜ちる
河原ちゆ富士乃ふく

ゆすてこれを日もさして河原風
吹紙乃河のまほろぶきぶくて京乃知人の
ゐ〳〵書乃ゆ行ゆく頃
みな月乃　あ川さ紙河ふ　今乃雨
庭乃流乃　ちらすそ乃　霧ハ白
ゐとくれ　う川川うゑ　本も茶も
ぬうき乃行也　ワうえ行　四よけう
東慕に也　老紙乃ゐて　ゐとくよ
みぶにこと乃　やとなう　れりふと
めをあし　ゐこうくこう也　まれくよ

さらに人乃　いて入ゑ　幸紙乃日も
みくれれと　河ゐて福い　もてゐさた
掏乃を也みく　行れくを　紙茶紙に
ふたうを　むりゆうれ　光乃とも
かこ福ゆく　そてくた　ゐこ河ゑ
ゐうをを紀　うに志めを　我いほた
ゐこをを乃ゑれ　くこりに　行ゆこう河
ゐこ乃　不尼紙ゆ乃ハ　数やを光の
タゆ行ゐき　うきゆく夢　小ゐ乃ゆ
ゆうふく　市め商ひと　河ゐとあを

みはいをは　みをとひは　志ろうをとは
ふるくふ　門いらせをと　いせとるく
我とるあ　河をとの川　うの海へき潮
をくぬれて　みくにのとれ　をとこ所業
我ふ田舎乃住ねうう　うきはをはくにくれ
をとをうをを　ふ京はいのくはつん
田舎は夏大雨降り　嵩しいはくうくさ
しいせるくをなく　て濤乃かをひをたく
ゆしふ
いせくをう本宮戻さし　茶湯さく

味噌しかしぬ面乃はれく
時為さへ文月盂蘭盆うけく耳乃まもる
くなけを十三日ふ
あをはこうむる去聖霊ふ立うとれ
まつうんして乃山乃くきた
七月廿九日宗祇年忌よ歌句
乃こしつ歌為やをわを国秋乃月紙　宗祇
胡ふかあさけいはくへ乃夏
又
をとわなをふひなをはいかをなこに

民親法名

君とうきをしたまふ歌
はしたまふ歌乃懐紙かきくゝ宗碩うゝ中上世話
歌豊雅亦以流秋一四三よ
こうれきゝ月日つれつれ一ゆくゝ乃
ふるさとのきうとたもひ宗碩乳
いたのうん歌乃雅乃はくゝたに
おひ世うの宗津清山ゆゝ
宗碩ゆゝ也の歌やいうん也雅歌
うゝなの萩乃也ものしはくゝや
志しはもうゝ乃はなを意て

なれうれかくゝ乃あの歌の中ゝ
なひうに宗碩ゆゝ乃秋乃つも
きゝしときてゝ世なけまハ
宗碩あゝ乃ゆゝ極
かまはあも世ゝうひ乳乃なうもう
うゝうなきまうまをん
もゝとも不不老不死乃ものは
つなゝぬ世乃也ゝまひとうなよ
かゝまハ日と例をゝわもさゝもて
こゝうゝみうゝなゝ世うまをゝ

統秋 系図二八信秋ヒ石
位下雅示頭豊原信秋法名道岫慈岐奇龍秋一男清秋ノ孫也
從四

ちうれいやしき乃乃のたくひなく
きこえ乃けむ名こうたうけ道
豊雅示乃統秋京よりあつまりて也田舍みち
もうこ河もれもいとと言ふ目もなく形見よ
又乃ひとひ八十よちうにまかりて去ぬ
乃秋京へ文の初也ぬ月に山月乃ちう十九
日いまハ九折坂山道事起ぬあさうぬす
なとうきくぬふ世日ちり明まうもぬとと
ちん称ハ統秋ハ我道乃長者ぬして 大学
乃御師範ぬまいりと其志ちへ世井とひうし

笠一流ノ祖也

又屋西とうちうの乃よ前ハ見ハ歌を取ち乃
面庭乃二首三首九哥まうく其題なる名
をえものことふなうけ姫ちくされい家ぬ
いう原まくなのさうもたんの京北なちハ
技ちうひ乃哥動をして七日九あとハ也
とひぬん又ひをれ形くを新人も松ぬ
ちう 三条西殿 道を院変ぬ一てもうなちに今日九
一續御奥行四ちやもと原乃ち姫ハ暁乃
寝覚ぬ九ものハ十前乃哥よちうぬく
懐をけ人ぬちう志原なちう同三条門府ハ

五國廿十首をよ清書かゝせ続秋一回忌よ
付て追善のため十首乃詠歌か一覧気嫌を
そよほし俳諧乃点取乃事斟酌なりしか
さらく事俳句見様をかく俳

小車のめくる間やとらやきこえ乃秋語
くすのとの間たましいはひ以語よ
いまいそも秋乃風の語く吹てそ
なほたるをさらまふきゝやなたらん
さく萩乃もとのしほくやすゑの露と
きえしなこりも乃こ間に乃葉

たゝくにわ道をなまさくのうこそも
花いく何ま乃あとなれおつる葉
おりけるもろきちきて節須乃
称乃こゑ井よなほ乃こ間らん
露ぬのこ草乃うけ水もうけむくや
こゑのえこゑれきふ乃まむけよ
よしやいま秋あとたまでも宇治乃山
うきふのこ間おもうけもうつ那
秋乃本のなうれやこしも雨よりしる
ことゝれむ乃うきそのひうすり

義なくていかいなくうらみくきの
おとや身ふるふ　形見なりまし
のちせやまさるくさのちりぬるふるの葉の
いろやはかりなきけふの雨
人のうへいひをかはせとあれをもて
あはれなるものはぬうきせのなしも

去月三日当札今日十九日ハ先
以ハ懐紙

一諸須中事諸下ハ心ハ地ハ
諸検定ハ地諸祈ハ

一諸御来ハ方坂ハ紙上ハ
ハ茂情ハ毛雑毛紙面作畏入ハ

一去月十六日不毛病病ハ
諸札ハ見人年来ハ
ハ毛ハ義ハ一度毛書ハ会ハ
一向年ハ日以ハ第中入ハ

八月十九日

第毛当書

以上毛札ハ百廿日遠ハ
統ハ一回毛遣毛流度十前十一月十二日ハ下者

統秋上判

書加をかなとのもの

悼統秋湖居和歌十首　以法華經題号置句首

めのまへにおもかげをのこすぬれをうけもたいとく
さとりをひらくこころやうはさ年
うゐせしせいやいとけなかりしとき
こゝろばへしれてあはれ人をもとゝなく
はなむこうやうにちりうせぬひかりかな
なりしなりなりきやうはいつゝ年
うちなびかぬ花ぞなかりしもとゝ
をに酒うゑてしたしきとゝ

給人乃中にいてゝ
をのゝかまきれぬすゝなりもは
むけまりとなりてぬるよりのよ乃
むさくなれしかの
家ゝとうれあはせなるこのむこれ世に
なるわかんよりすや
君よはるゝひとりよとて
みちのきいはあはひとりのゝ
やよ屋ゝくとうあたもきうせるや
たいとくなりかとあるこれ小

うけくあれときはなにはれかなかれ川
見よやきくゆくゑのうらかなし
為一周忌自我偈を清自筆にかきうつされ
て被下侍奥書に云
此偈者一経所説之眼目諸仏出世本懐
也而今迎故雅楽頭純秋朝臣周忌辰拭老
涙染短筆御廟為霊増進仏果乃至法界
平等利益
大永五年八月廿日
三条西殿
桑門尭空
志つふかき月は川のゆくゑのかれ

涼しさにあきそうことおもふまのうら
旅窓乃秋ちかく萩荻をとふ風をきゝての松
うち(?)のうらふくしけしおもふくやまも
たゝきなきうてのきしとゝまる
この萩をおもふくなりけり
てる月もよあきのかしきれたえきのまれ
おもひをくなにや露も見えん
去年乃秋霧稀なれちらし紛しなやれた
新庭よ鳴て秋
あはれなる川稀なれ侍しなれのあはれ

すきうりのまくしーのこと
又東六東略あいけちゃうるたむ又松しー
のなさなれた
さちうりをとるとゝぬやよ迄なん
ゝもしの若みを松むしーの事
尾州人
長田宗兵衛太郎親重ハ年月病ーて剃髪
たうひのこあるとくを公にもとよりて志う
あ迄を結恩めをとゝ剃てく後ハ中ハよりちう
へをとのとゝりーされりひをゝみをうひさし
いけう事を世ゝされい又をれとゝりゝを

ゝくて月日ハ春ハ霞ハ梅よ霧ハ雨ハ雪ハ風ハ
く一振一勝ハ小ゝく原ハ松まく法ハしー何
ハいまりをとゝのこのをのをのよりう
あ家ハ今日あをのようなひふーく飢を
のニ字ハ富の松とゝもいをーをとゝを
書ゝをを孫くみをれちゃをハ法ハひう
信ゝくあーくゝ四備の色無ゝを
よをゝハ縄根の世ありひーををに
ていんをを世をを思るをひくのゝみゝ肩
の十七日の東迄を有の飢者にまいるを下

向して水底乃三繩の一尺なけれハ少や自
左少といふうさなれないか頭ハ入く柳よ志め
あうくすを見くそうして死とと也ハ何
したの已の刑下女見つきくなるるか告
けハとなる也ハ也乃ひいうそうとことに
やあ日さきうといさかの組蓋をたゝく
志川うひ思うこうはけむことあく也何さか
らすすくて人ハ南庭乃口端してさしも
ちうく戦場ハして討死とる事待乃意
事也虎ハ死て坡とゝめ人ハ死て名ハ蓋

少くしとといふ何乃と帝代乃事なるて
坡ふうひうあ六字の名号ハ白乃うよ
亟陪白ハ六字ハされうまくきくう
ろさしとといふ而志なる
名坡なく霧ハいのうちハ加宗ところ
且うハうとして南無阿弥陀佛
ひくもうう思る入をあいうもかくも
るいぬとての南無阿弥陀佛
あさうか乃霧ハいのうち乃杜ハへて
風をもまうく南無阿弥陀佛

みづ川殿川まで御ふさけゆん
うれしきこころもも南無阿弥陀佛
あらたのしさやまさもたらくを
何いきつくへき南無阿弥陀佛
如きいつくうきこころをもそれさて
いのちなりさの南無阿弥陀佛
又加賀守安元第舊好あまと兼又
今川殺官斉藤加賀守
いくくくそやかくなうくてうあすり
あひはらくくき堀よ
あれとなれをちうへのうへのくも

かくをさうハなる家うさうめや
又ハ八九年乃恵白てい
かくれしとはひとはしるる
をうきを弟ふうはうとなる
九月廿日ハ野分れうくく吹出く来も
きうう老乃ふ面しあもなきやうにく
的御あたの夜乃ふ落を
萩うれしくく如一元う弟を
野分廿来乃れ乃あさけ白
豊野山門再興記加ふあふなふ

をのなりこまうれはかはしをしたて小源氏物語の光のもとにをしてを
開とて

宣ふらいはなるまくかりむ何をの川
この御ふねをてのかをの光の三位
はかをるやを人よ
見ぬ人のひれ雪をきえんよはまるの
なくさめるのこゝろの慕ことを
萩の折をを人のいひをこを原寄
秋風の吹きををんいとをきの

ををなきをををしををや生原
返
あき風の吹みをををいををを
おをてといをやこて詠なる事
論宿の庭よ桂の一文はをなを道の程
文里ハををなを原ハをををを
法楽よ
吹きの繁ハをやまの雪のあさ戸の風
はを流石一枝一瓶奥よ入をを奥はを九
御清見の関ををくなんをて書をく

横山猪主

ら也
清見ゝる明まくかき流のうゝ
月乃宮ゝ也ゝ乃ゝ
ゝ也ゝいなくて
清見ゝる宮ゝ乃月乃ゝゝ乃ゝ
なゝあゝよゝ也ゝ乃ゝ
ゝ秋乃九月の也ゝ七旬有餘ゝ長命な
ゝゝゝゝなゝけゝゝ七十八九月也ゝゝ
事ゝ我ゝゝゝゝく
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

光よいうなゝゝゝゝ
ゝ和乃清歌 三條殿 内府清宣清方紀信 屋形 閑口 小原 氏兼 親
由也 義作字
高保 信 珠易
くゝゝゝゝ志川乃ゝゝゝゝ
いくゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝくゝゝゝゝゝゝ
ゝゝいくゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ八十八ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

くふ乃くまもそれしまさりたり　氏兼

いくよせ乃なかの月の宿ふかきにたて

光せぬやどのしら菊乃花れ　親高

もろ山とも小光ぞちぎりける乃

なか月もなほ秋くま乃あらん　深悟

光くも乃なほ秋ゆく雲まも今か月乃

くまよられてもしはのなかまえん　保易

此時短冊奥津彦九郎所望に依清書誓古

乃ためゆるくわ遣書しやさしきあまり小

又書くはへ侍り

宿ふる営ていく秋光乃なかの月や

松くまむもおもしろのなかきまに

冬なかしめ房を一夜ふかくともてきさらし

そめみてよ

なとまのこころのまかせ乃秋乃夜れ

はなさ秋のうちに神無月の乃れ

［氏親］西郷よりとして九ろくさうけあ一枝を

こせられけるよ松くらま遣頌

何れのなかの小こ乃一えたていつかして

宮まいりなれ乃いろありさく年

御返事

かたくにやうらんの中に
はまなすも爲墨絵にして
下野國京須明太郎殿にて
乃度一見にて
とうろうて見物一首進ぜ
着せ申候
たゆ討死せく悲傷よ
をくして記
世間乃治るを
あれさはいつ
ちうろうて

言野乃をくに
やうくは一首辛都婆に書付へきなり
あるは十月三日 今川被官 孫太郎
いと志うへきあるを病病とうひて
なるとく死去
其なけさを
よはあくはうし
をはよ
からむ君の神
寢覺九度なき

ありしよりの一夢ハうき世れ中をさく
すなとゝ為ものゝ[illegible]たりひ何と埼く
何のよりあるよむせひ乱るの
夢ゝとゝなるといハ川ちたつゝん

今川被官
中沢英郎法名保悟かゝこれをあとゝて富士
綿一把其文乃ゑ[illegible]ゝ
なめくに[illegible]くさ原の乃姫ゝ[illegible]乃
さゝねさゝ[illegible]る雷ゝ[illegible]
保悟ゑ

雷はゝて[illegible]乃[illegible]

さゝねさゝ[illegible]ゝ[illegible]
十一月十日日文乃年[illegible]
くて

[illegible]乃成のむれゝ
なふれひゝ[illegible]
病病よ日沢[illegible]
たゝ[illegible]
名ゝは農一[illegible]
あ[illegible]

府中一宮ト浅間一所領座也
あ[illegible]ゝよ南宮[illegible]社乃神ゝ志貴海河
守恭宗ひ祢ゝ我[illegible]て南社造文

世来乃事、何きうに代々守護乃敬仏
回形文なと乃事かゝるとく後文おいひ仏
うし仏と寄方ゝ物心あるたくうた
かゝし

何とうれし志ゝ方ゝ
道乃くまれくきくものこし

氏親一男

十一月廿日龍王愛御元服有て立命氏輝を
乃く祝云沈乞例年に毛ゝ仏と同
廿四日皮祝云法楽を初歌
霜とをしとりりと牧ひ乃とうみと

古今集冊書立冊に傳切紙及氏輝まいら給
とさ仏ゝあとうとなきゝ和歌思ゝ
小ゝ仏ゝと氏輝廿小ゝ毛ゝ道いと
且如くなゝ世仏ひく後自見ゝ乃とく世
田乃毛ゝ乃ゝ毛世ひ毛て仏て八人寄ゝに
あゝら歌をうんや
あさけもと空しゝうゝきこゝ
我家乃道小仏ゝ人ゝ
宗祇故人ゝ道物心深うすして猶家乃
師範となる弟子は迫傷愛殿下三道至慌

爰堯空唯爰一人乃御口伝とうや長河回宿
して数年之枕心一紙乃物もきこえたる
つやうくは集法郷たちの只一篇あるく
乃ゆなる所下世時よりまて重院爰乃法門法
眼恭謹回聴あるる人乃中心ようしてて
ゆ月法姫所よいひやうくをとあるしうる
孺月十日より主訣無りめ乃席糸舎爰白
ゆやたる所姫所とまにたる氷の邪
投袖ひらてゆとひしるる乃ゆ後りや
長谷寺鈴谷鈴乃不長谷堂あ法東福

火乃あやゆらすくゆらゆなるしをゆ
ふうらけらくはのよるひ乃法楽主訣
不可乃爰白
堪火乃いけ刹こ法数あるこの邪
火坑変成池乃仏まくなる形下建長寺
東堂厳堂ゆくゆ主府あるる幸乃法ゆく
ゆや下智寺時茂和漢連訣無り
かくこえくく片枝まくむめ乃乳
雪消尚臘天　建長寺　長楽寺
寓児談学語　天龍寺　養得寺

後白河院氏姓乃代より俗家頂法師月輪
寺よみくよりの中比七り二ところ
なりよい三りあまり一りの
二りとなりぬ家もいかなるわ
世乃中乃世ゆわ
表布衣所三郎ゆ郎と云後乃小袖宮
町とのひろ小乃法ふあり世乃ゆ
くゆ乃ふくさとくて八てまり
ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃
つ引ゆ乃世つゆ乃とて

あつくゆ乃ゆ乃世ゆ乃ゆ乃ゆ乃
三郎ゆ郎てまの世ゆわ
中御門一位山十一月十七日御逝去法を下
長長河京都にくハ長醫御美恵されハ
一七日薬湯燒香国ナ一月十七日比御月三塔小
乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃
さくぬとう毛毛ハゆ乃ゆ
御辞世乃歌とく見を結ぬ
たりひあくゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃
神よなう御くゆ乃ゆ乃ゆ乃

獲大納言宣胤氏親男也
大永二年
八十四才
宣胤卿

はれ世ーとゝはなくてとちの人文乃とゝふ
清うゝとして
乃ゝ行いなゝなるゝ世ゝ乃ゝ神乃ゝよ
たきゝゝゝゝなゝきゝ川くきゝ乃あと
清辞世乃哥文句を白乃ゝゝにをきく
三十一首乃頭回府清宮御中清く月ゝ乃
始一續ゝ御ゝ清句ゝは一續中ゝ哥二首初
秋霧扱書ゝ哥書
あき乃風萩乃うゝ葉色藤にして
神ゝや霧ゝなゝんとゝゝゝゝ心

後ゝ花ゝ何ゝゝなゝ乃ゝいゝゝを
世ゝゝくゝゝぬ音乃ゝけ
ゝ一續ゝ流せゝゝゝくゝゝ事ゝて世ゝの人
乃文ゝ
みくゝなゝけゝゝゝて世ゝゝゝゝ乳人乃
おゝのゝゝけゝゝ事ゝゝゝゝゝ
一下野守時義燈火色ゝ来て開侯嚴嘗乃
不安清濁ゝゝ扶持清ゝゝ川ゝ事なら
ゝなゝゝ乃清ゝてゝゝ測乃老ゝたゝゝゝ
一清濁清来て煩ゝ菅なゝれゝ人ゝゝ川て

められ面白せられくたりくき人を忽ち発
起道乃ことにくみし人ともあるす
一不論用捨をもとめ利と賣買をなんあ
志しは等乃人に佛神ひとも世乃
乃望表はをもいに涙書月乃奥様をも
しす朋友にもうこくしさ乃ゆをも
もくこくせ多唯利と賣買乃工夫暁乃祈
覚をはすなるんやは出あは活計なくこ
ちとをいしく又如形をも紛寺仏何ん信
法乃利と賣買はたなくくく又酒屋にて
京堺南都坂下おくもとかも利と賣買世
はかるしさ形くく
一巡礼往来時と魁と風ない形と事意忠
乃くさりかいと巡礼と形をのをいもと乃
こしかを拾もと乃民かくく許容せ多かと
なんあるいはすかを吾乃法いくなとあ所
くくすとす形すよいかとせくく
一多くくく疲侍一所懸命乃紛かもかる
いをといっむともせくさもとかを書ふいと紛を
ふあをとくくはさくくせはのはくと男い

つまくをひろひあつめ乃まくら乃やゝと
なるをいとこまの所作不法乃ものなる
乃ゝされい心あるくひとくなとする
もゝ可ゝ一紙半銭乃ものゝ者ゝにゝとと
ゝい女人乃ゝ乃ゝ慈悲乃心なるゝ
所乃よ物ゝゝひ彦ゝ門くゝゝとゝ者いな
たゝ歩

慈法和尚歌

ゝれゝこゝ乃めゝとゝのこひゝそゝ人
人乃世ゝゝ所道ゝゝゝゝゝゝ

ゝ世ゝゝゝゝ彦人とゝいゝゝ心ゝ所ゝ又古今
風ゝ歌

ゝひ人のゝきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝのゝひけなくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
不運乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一柳子歌 柳付食ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
彦ゝ家ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

れよりあつかひゆき者乃ものなるべし

一参禄学道乃人ハ乃ものゝ大切乃人なるべ
きゝハあれとなるまゝ乃参禄部部ハ法
侍れかくを退とそ損也

一教外別伝不立文字乃宗師乃ゝ雑人な
らし参者凡魔とゝも天物ハいとゝも
ゝ人侍しゝ礼を世法よりハ海越天物
ハやゝ雑長老坊と会下よりあるハ蓋
家よりあるハ檀那をかりゝめ山
林ち藪を結講しゝ参禄と揺し

我門揺とゝ知識をきゝ
うく会佛三昧ゝあるまゝき時乃
なるめとゝ人侍ハ家なゝ程も
侍ゝ乞ゝハ我等やうゝ五痴暗漢乃浪
乃ゝ侍

一又祖乃系父母遠去聖忌乃月忌決擯流
寺次第度以不あるに多人数ハいるめて
や盆彼岸を各別毎月人数ゝめら数
きゝゝ一月乃中度ゝ乃月忌寺次第決擯
乃雑事めゝみゝて侍ハ揺なるべ

一ちゐ物乃具をとりあつめ給はせられ
給ひ侍乃ひとも いとあ
ふとうけぬ物奇き給はせ給ふとも なき
胡蝶乃法斗絶き いとうとう云人乃給ひ
宇津山乃僧年法師乃ものをとめ給ふ
と後六とせ京よりあ月乃ものとく臘月廿六日より又
ものを給ひ心とくく
ことし乃嘗のたきこの国乃門あ乃
うたひ乃やとりのやとりもなき
門出い山塚新まうのりん乃事なき

いとよりいとよ世乃影もこゝ乃
うたひ乃屋乃の松より給ハ
彼山乃荒蓋塵といふもれあ国い蔣箱行色
うきかれ給ふあなかして不出とき
給ひしあ廿七日何た大宮姫りてこ
かしこゝ理ものりう中くあ
見ゝ給ひ
我庵ハ蓋屋こゝ乃れ
とゝよ書ハりてとやとれ
ハ書ハ十首

ほうにく立うと
ふるて人ハ庵ハ
立くうと庵乃
いけこ蓋とも
心里乃三乃皮と
うきゝ乃ゝとゝ
雪ハ里を坂ゝ
うこそうとれ
はこうえく日乃
あまりはいふ

ほうにく立うと、アとをむと名を色
ふるて人ハ庵ハ
立くうと庵乃
いけこ蓋とも
心里乃三乃皮と
うきゝ乃ゝとゝ
雪ハ里を坂ゝ
うこそうとれ
はこうえく日乃
あまりはいふ

ゆき　ゆき
庵に結ぶく
みゝハ雪乃
名のゆき
ゝ乃ゝ札所
ハなゝ
くかゝ心さと
ゆを泳を
よ言はゝ

雪ハ
を児乃嶮坂人とよむなを
もゝゝもふゝ
けひ乃所の言法あ河ハ
うゝこゝゝきゆ嶮乃生ハ乃を
ゝ所こと言
八十ゝく書ハ
やとも言ハう
言乃うゝ法を
一来ゝを立ゝ

雪ハ
を児乃嶮坂人とよむなを
もゝゝもふゝ
けひ乃所の言法あ河ハ
うゝこゝゝきゆ嶮乃生ハ乃を
ゝ所こと言
八十ゝく書ハ
やとも言ハう
言乃うゝ法を
一来ゝを立ゝ

投上人乃庵ようき事法はなきてくみし
世小もよね年乃くもれ満足なりひ初も
法皇人乃心さしまりなれと海草て
中もなくしてくみ涂夜よいうもく
何もむりて乃事ふれとやある家
くるといふ人のまことしほへき
除来乃何しら試筆小
くるといふとも来もぬたまりを
きくなけさ乃きれあいはよ
れ外二日乃ありた山梯よ出ふく長法

したみく
何もうもりてもひ乃山梯よ
むせにといりん名こうれれ
正月廿八日氏親御愛は興行よ
不尽やこうもきれ家乃列れ
きこ乃山はたらくく中法
中取法方入御厨くは會席よや二月八
日朝比奈祭参り七日芋初よもに法門
お一杯興行
なくあきいうもいうもぬ富もの

九日朝より入小河爰清見寺三蔵ゟ法心
乃とゝなる法華ゟ之ものゝ法滝の御
神社しゝ切り上ゆ人間やうふんれしさ迄
悪世度ハ子細をゆにはなくゝ作るもか
と思ひ作りよりて作るなるゝ作くゝ
作ゝ作ゝ世やうくゝ長下ゝんとゝなとゆて
やうくゝよ長崎ゟ法華紙ゟよりと乃繁も
らてこゝゟ法れ同十日宇津乃山ゆと
九子宋長一首しく作るなとゆつ長十
一日乃子朝より小川へ渡ゝ立ぬ小川長谷

小川法栄寺

川元長ゟ句遠ゟ迄ゟ長ゟ十
三日始行恭以者長ゟ同道千句
三日發句
杉乃葉ゟ新ゝ川しゝ山さゝ
南國ゟ會まくゝ乃こゝ海ほそさ一しゝ
杉り海ゝ乃ゝ長ゟ又西日
法ゟ新西海の家畑ゟ柳ゝ乳
行くゝといゝ川こゝ乃ゝ名ゟ
餞別乃會席と杉行ゝ法ゟ乳
同廿日ゟてゝ小川ゟ長ゟ法華

以神はひとゝ
をちわのまいまちかたらひ
おやのいさめとたまはるとも心
ゑ
わかゝ又君まうくおひの出はて
あれむよはまくれとろまぬ
ゝうまゝとうまさ東乃中山ふとか
れやと云而よ一宿して
いくひもまゝひとういの国なら
高砂祝さめよさよ乃もやり

投身をおりまして乃心なりけいの国
なるいひおほせられぬやうれ
抑長山乃事而行人ハ山ふして齢ひた
けゝ男行ほとく事ゝも弱られよ
男かゝくいくハ山ハむ一も心とや
けの国といひまれそいくく長山とハいひける
ふゝ男ハ歌乃中よ何ものくゝ心なゝうもとけ
ハめやもの国き歌よもあもとゝ風ゝ心ハ
ひとゝ旅乃ぬ小神なとぬまくやゝ
者国と投上人乃東海道記よ何ものとされも

今なをけぶりさよはの中山さ葉乃長山
とやとゝ人を詠をゝまけ侍と思あ世給
はゝ東海乃記ハ糟屋中務松堀平為ときゝて
こゝろひ小川より清明しく一見し給
しなをゝ廿一日熊川巻能亨廿二日別一
杯奥ゆ

今ゝ鷲ゝ山ゝ乃ゝ山さゝゝ
南禅教年さ面く普請ハ出来ゝ
ゝハ推摩し寺くゝ乃ゝ鷲ゝ巣
ゝとゝもいゝくゝゝゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ

今川被官相州住人

見くゝ乃ゝさゝ面ゝ洗面奥して鷲を見ゝと
してこゝ面ゝやゝなゝとゝなゝひゝ世給ゝて
ゝをなゝ十一熊川廿一日二日ゝ雨ゝ霧面三
月一日まゝく晴もなく降ゝて又
雪乃ゝ

雪ゝ面乃ゝのゝゝけゝゝ表ゝ板屋乃
三日府中六部変的日ゝ新日ゝ
ゝ晩変ゝとゝく

花さゝくゝなゝて三乃ゝゝゝ
今日桃花乃ゝ世面てゝなゝ

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan